The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

正法眼蔵における可謬性の理念
——葛藤の巻をめぐって——

小田桐拓志

本稿は、二つの問題を扱う。第一に、正法眼蔵における可謬主義の問題であり、第二に葛藤の巻と無情説法の巻との思想的関連性である。可謬主義とは、ごく簡単にいえば、我々の判断は常に解釈である（仮説的である）という認識論的な立場であり、現代哲学全般（現象学から分析哲学まで）において重要な概念として定着している。本稿の目的は、この可謬性の理念がある種の正法眼蔵のテキストにおいて中心的な意味をもつ可能性を指摘する事である。

可謬主義の考えを理解するには、現象学的解釈学における「地平」という概念が有効である。知覚判断を例にとると、我々の知覚はそれ自体解釈であり、解釈である以上その判断は既に無数の前提条件を伴う。例えば我々の知覚は決して対象の全体を捉える事はないから、知覚判断はいつでも暫定的である。眼前の事物が三次元の物体か二次元の平面図かを確定する根拠は、実はその時点の知覚体験の中にはない。更に分かりやすい例を挙げれば、ジャストローのウサギアヒル絵がある。この絵は見方によってウサギの絵ともアヒルの絵とも見る事ができる。この二つの知覚判断を分けるのは、主体の側の解釈的態度である。即ちこの曖昧図形は、知覚がそれ自体解釈であり、それ故主体の側の何らかの態度、構えに依存する事を示している。知覚する主体は、ある種の意味（Sinn）を予見し、そのような予見と共に図形の中にウサギないしアヒルの絵を読みこむ。しかしそのような予見は主体の側の作業仮説（現象学的地平）に過ぎないから常に誤謬の可能性をもつ。それ故知覚判断自体も、誤謬の可能性がある。

通常の知覚において、理解や解釈の全的過程は隠されている（意識に上らない）。我々は、ある一つの解釈に関わるすべての条件を意識する事は通常ない。即ち、解釈は（また知覚は）いつも部分的であるという事になる。

可謬主義の認識論の特徴は三つある。まず、知識が常にその地平と共にあるなら、我々の知識は常にその先にさらに探求される余地をもつはずである。つまり知識に終わりはない

印度學佛教學研究第五十八巻第一号　平成二十一年十二月

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

（究明され尽くす事はない）。次に、知識の間主観性が可能となるのは主観同士がある程度相互にその構え、態度を共有している場合に限られるので、例えば師弟間の相互主観性もまた両者の共有する認識論的な地平に依存している。換言すると、異なる解釈学的相互主観性の間に認識論的な優劣は必ずしも存在しない。最後に、知識の地平を構成するのは日常的な生活様式であるから、知識は日常活動と共にある。

葛藤の巻は、七十五巻本では第三十八巻に当る。奥書によればこの巻が成ったのは一二四三年で、無情説法等他の幾つかの巻と同年である。これは道元の越前移住前の最後の年であり、同巻は宇治興聖寺における示衆の最後の巻でもある。巻の主題は、その冒頭近くで言及される次の言にある。

先師古仏云、葫蘆藤種纏葫蘆。(1)

先師古仏即ち天童如浄の言は、無情説法の巻でも引用されている（先師天童古仏道、葫蘆藤種纏葫蘆）(2)。即ち、葛藤及び無情説法の両巻はあわせて、如浄の「葫蘆藤種纏葫蘆」という言に関する道元の注釈であるとも理解できる。（この言は『如浄語録』にも見える。）(3) 複数の巻にわたって引用される事から、この言が道元にとってかなり重要な意義をもっていた事は疑いえない。道元は、この言について次のように述べる。

おほよそ諸聖ともに、葛藤の根源を截断する参学に趣向すといへども、葛藤をもて葛藤をきるを截断といふ、と参学せず、葛藤をもて葛藤をまつふ、としらず…(4)

葛藤という巻名も明らかにこの一節から由来する。英語圏の代表的な正法眼蔵研究者の Carl Bielefeldt は、この葛藤の喩について次のように述べている。

禅テキストではこの比喩は、典型的には、裁断されるべき（特に知的または言語的な）障害と解されるが、道元はここではむしろ同じ比喩を、師弟の「絡み合い」ないし「あい纏うこと」(5)として解釈しようとしている。（葛藤の巻解説、小田桐訳）

Bielefeldt は更に同じ葛藤の語が complexity, complications, difficulty といった様々な意味に翻訳されうる語である事を指摘する。つまり、葛藤とは裁断されるべき障害ではなく、むしろその逆に肯定されるべきものであり、禅師弟間における相互作用の複雑さを藤のつるが絡み合う様子に例えた視覚的な比喩であると解している。確かに「葛藤をもて葛藤をまつふ」（傍点小田桐）という表現は師弟間の密接な相互作用を連想させる。更に『如浄語録』においても「葫蘆藤種纏葫蘆」は「二つのものが一つになって離れない事」の喩えとして使われる。(6) 従って Bielefeldt の解釈はある程度妥当性をもつ。

これを先の解釈学的な観点から言いかえると、「葛藤」とは師弟間の相互主観性の複雑さを表現する比喩であり、更にその解釈学的性格を表すと考える事ができる。師弟が「あい纏う」以心伝心の相互主観性は、両者によって解釈学的地平

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

が共有されている事を暗示する。それは裏を返せば、そのような相互主観的な認識そのものが可謬的である事を暗に含意する。仏教学的には、「葛藤をもて葛藤をまつふ」という表現の中に本覚思想的な「煩悩即菩提」の考えを読み取る事も可能である。つまり道元は、葛藤の裁断を求めるよりも葛藤の複雑さの中に止まる事を求めていると解する事ができる。

巻の具体的内容は「皮肉骨髄」の故事を中心に展開する。この故事では、達磨の教えを受けた四人の弟子の理解が皮肉骨髄に例えられる。この故事は、達磨の仏法の髄を受けたとされる二祖が最も深い伝授を受けたと解釈する事も可能である。しかし、道元はそのような解釈を言下に否定してみせる。

二祖に爲道せんにも、汝得吾皮と道取すべきなり。たとひ汝得吾皮なりとも、二祖として正法眼蔵を傳附すべきなり。得皮得髄の殊劣によれるにあらず。…髄はしたしく、皮はうときにあらず。(7)

「得皮得髄の殊劣によれるにあらず」即ち皮と髄との間に差異を述べたてるべきでないと道元は言っている。(8) 道元によれば、肝要なのは「汝得吾」と言う事実であり、それを師が道得した事である。さらに、道元は次のように述べる。

祖道の皮肉骨髄は、浅深に非ざるなり。たとひ見解に殊劣ありとも、祖道は得吾なるのみなり。その宗旨は、得吾髄の爲示、ならびに得吾骨の爲示、ともに爲人接人、拈草落草に足不足あらず。(9)

巻名の「葛藤」が師弟間の間主観性の複雑さ親密さを表現しているとすると、この言葉の意味はさらに明瞭になる。即ち、皮肉骨髄の比喩は、師弟間で共有される相互主観的な解釈の地平性、その多様なあり様を表している。皮、肉、骨、髄それぞれの相互主観性を可能にする地平はそれぞれ異なるから、それぞれの理解の優劣を述べる必然性はないはずである。それを更に別の面から言えば、達磨の言う「髄」とは修行の究極の到達点を意味しないから、例え髄を得たとしても、そのような相互主観的な知識の追求に終わりはない事になる。

髄よりも向上あるべからずとおもふことなかれ。さらに三五枚の向上あるなり。(10)

即ち、葛藤の巻の内容は、総じて先に述べた可謬主義とその認識論的な構造がとてもよく似ている。(前述したように可謬主義の認識論においては、知識には究極的な終わりはなく、また異なる相互主観性の間に必ずしも優劣を定める事はできない。) この事は、正法眼蔵の可謬主義を示す確証ではないにせよ、少なくともそのような解釈の可能性を示唆している。

同年の無情説法の巻では、この同じ如浄の言はどのような文脈で言及されるのか。

いま高祖道の宗旨は、耳処は無情説法に難会なり、眼処は聞声す。さらに通身処の聞声あり、遍身処の聞声あり。たとひ眼処聞声を体究せずとも、無情説法、無情得聞を体達すべし、脱落すべし。この道理つたはれるゆえに、先師天童古仏道、葫蘆藤種纏葫蘆。(11)

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

この巻は、高祖（洞山良价）が、無情説法の故事に対して発したとされる次の詩文がもとになっている。

也太奇也太奇無情説法不思議若将耳聴終難会眼処聞声方得知

道元はこの説話を受けて「この道理つたはれるゆえに、先師天童古仏道葫蘆藤種纏葫蘆」と引き取っている。普通に読めば、これより前段の部分が先師天童の言についての道元の解釈となっているはずである。その部分を見ると「耳処は無情説法に難会なり、眼処は聞声す」までは高祖の詩文そのままであるが、そこから「さらに通身処の聞声あり遍身処の聞声あり。たとひ眼処聞声を体究せずとも、無情説法無情得聞を体達すべし脱落すべし」と述べる所に道元の解釈が表現されていると言える。即ち、高祖が無情説法は耳で聞かず眼で聞けと言ったのを更に言いかえて、無情説法は耳眼のみならず全身のあらゆる部分で聞けると主張している事になる。この断言と、先に述べた葛藤の巻の内容がどのように関連するかを確定する事は難しい。しかし一つの可能な解釈としては、どちらも解釈の一面性ではなくその地平性を思考しているという点で、道元の可謬主義的な思考の可能性を読み取る事ができる。「耳で聞く」「眼で聞く」無情説法は、解釈の部分性に立脚しているという点で、その可謬性を十分に考察しえていない。「通身処の聞声」「遍身処の聞声」即ち解釈の他のあらゆる手段、可能性に気づく事が肝要であると主張していると理解できる。葛藤の巻について述べたように、先師天童の言への言及から道元の可謬主義を読み取る事ができる。

むろん道元における可謬主義という解釈的可能性は、これまでの考察だけではまだ仮説の域を出ない。（筆者はこの可謬性の問題は道元における本覚思想的主題ともある程度関連していると考えている。）より厳密には今後、現状公案や仏性の巻等、他の多くの巻の検討が必要となるであろう。(12)

1　河村孝道校注『道元禅師全集』第一巻（春秋社、一九九一）四一七頁。　2　同書第二巻（春秋社、一九九三）一二頁。　3　大正四八、一二八頁中二〇　4　禅師全集一巻四一六頁。　5　Sôtô Zen Translation Project（http://scbs. stanford.edu/sztp3/translations/ shobogenzo/ translations/katto/intro.html. The access date April 30, 2007.）　6　鏡島元隆著『天童如浄禅師の研究』（春秋社、一九八三）三〇七頁。　7　禅師全集一巻四一九頁。　8　先行研究に鏡島元隆「道元禅師と引用経典語録の研究」（木耳社、一九六五）七六頁がある。　9　同書四一八頁。　10　同書四二一頁。　11　禅師全集二巻一二頁。　12　先行研究に石井修道「『正法眼蔵』現成公案巻の主題について」（駒沢大学仏教学部論集二八号、一九九七年）等がある。

〈キーワード〉鎌倉仏教、禅、道元、正法眼蔵、葛藤、無情説法、如浄、可謬主義、現象学

（スタンフォード大学大学院・ABD/PhD candidate）

NII-Electronic Library Service